取、一筭爲奇、遂以奇筭告曰、某賢於某若干純、奇則曰奇、鈞則曰左右鈞、命酌曰、請行觴、酌者曰、諾、當飲者皆跪奉觴曰賜灌、勝者跪曰敬養、正爵既行請立馬、馬各直其筭、一馬從二馬以慶、慶禮曰、三馬既備、請慶多馬、賓主皆曰、諾、正爵既行請徹馬、筭多少視其坐、籌室中五扶、堂上七扶、庭中九扶、筭長尺二寸、壺頸修七寸、腹修五寸、口徑二寸半、容斗五升、壺中實少豆焉、爲其矢之躍而出也、壺去席二十矢半、矢以柘若棘、毋去其皮、

〔顏氏家訓七雜藝〕投壺之禮、近世愈精、古者實以小豆、爲其矢之躍也、今則唯欲其驍、益多益善、乃有倚竿帶劒、狼壺、豹尾、龍首之名、其尤妙者有蓮花驍、汝南周瓚、宏正之子、會稽賀徽、賀革之子、並能一箭四十餘驍、賀又嘗爲小障置壺其外、隔障投之、無所失也、至鄴以來、亦見廣寧蘭陵諸王有此校具、舉國遂無投得一驍者、

〔投壺指南〕投壺凡例

一大壺投と云は、中の大なる壺ばかり投なり、耳を投ことは爲ぬなり、常投法一格、構板八格、外に五十章あり、

一常壺と云は、壺にても耳にても、勝手次第に投なり、馬氏常壺、山家常壺、新律常壺、新式常壺、新格常壺とて五格あり、

一雜耳投と云は、一束にては六箭壺を投、六箭耳を投つ法なり、百章あり、

一投耳法と云は、壺を投ず、耳ばかり投法なり、亦百章あり、

一參投法と云は、壺兩耳を次第を立て投法なり、又百章二百格あり、

一奇投法と云は、遠より投、横より投等の法なり、七十法、三十二法、三十格あり、

一箸法と云は、俗に云箸のことなり、箸に三百箸あり、

一驍法と云は、反箭にて箸を投なり、其法二百格あり、○中略